

年齢構造を考慮した流言伝播の数理モデル

河内 一樹 (東京大学数理科学研究科 D1)

本発表では、次の1階の非線形偏微分方程式の境界値問題 (◇) を扱い、[1] で得られた結果を紹介する。

$$\begin{aligned}(\partial_t + \partial_a)x(t, a) &= -\lambda_1(t, a)x(t, a), \\(\partial_t + \partial_a)y(t, a) &= \lambda_1(t, a)\theta(a)x(t, a) - \lambda_2(t, a)y(t, a), \\(\partial_t + \partial_a)z(t, a) &= \lambda_1(t, a)(1 - \theta(a))x(t, a) + \lambda_2(t, a)y(t, a), \\x(t, 0) &= 1, \quad y(t, 0) = 0, \quad z(t, 0) = 0, \\ \lambda_1(t, a) &= \int_0^\omega \alpha(a, \sigma)c(\sigma)y(t, \sigma) d\sigma, \\ \lambda_2(t, a) &= \int_0^\omega c(\sigma)\{\beta(a, \sigma)y(t, \sigma) + \gamma(a, \sigma)z(t, \sigma)\} d\sigma.\end{aligned}$$

最初に、年齢による異質性を考慮した人口における、流言の伝播を記述するモデルを紹介する。そして、そのモデルの挙動を調べる上で、規格化などを行うことで (◇) に帰着されることを示す。

次に、(◇) をある Banach 空間上の半線形 Cauchy 問題に書き換え、それを用いて解の well-posedness について議論する。

そして、 $\omega > 0$ を最高年齢として、 $L^1(0, \omega)$ 上の有界線形作用素 \tilde{T} を次のように定める：

$$\begin{aligned}(\tilde{T}u)(a) &:= \int_0^\omega \phi_1(a, b)u(b) db, \quad u \in L^1(0, \omega), \\ \text{where } \phi_1(a, b) &:= \theta(b) \int_b^\omega \alpha(a, \sigma)c(\sigma) d\sigma.\end{aligned}$$

\tilde{T} のスペクトル半径 $R_0 = r_\sigma(\tilde{T})$ と 1 との大小関係によって (◇) の解の挙動が大きく異なることを示す。

具体的に述べると次のようである。 $R_0 < 1$ ならば、任意の (◇) の解が $t \rightarrow \infty$ で $(x, y, z) = (1, 0, 0)$ なる自明解に収束する。 $R_0 > 1$ ならば、(◇) は非自明な定常解を持ち、 R_0 が 1 に十分近ければ、自明解から分岐した非自明定常解は局所漸近安定である。

さらに、 $R_0 > 1$ ならば、ある種の persistence が成り立つ。すなわち、初期データによらない定数 $\varepsilon > 0$ が存在して、

$$\liminf_{t \rightarrow \infty} \int_0^\omega y(t, a) da > \varepsilon \quad \text{whenever} \quad \int_0^\omega y(0, a) da > 0$$

が成り立つ。数理生物学などの分野で最近注目を集めている persistence の概念について簡単に説明し、この結果を導くために必要となるアイデアを紹介する。

REFERENCES

- [1] K. Kawachi, Deterministic Models for Rumor Transmission (submitted)

URL: <http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~kkawachi/>

E-mail address: kkawachi@ms.u-tokyo.ac.jp